

埋文センターニュース

第 7 号

1998. 3. 31

津市埋蔵文化財センター



石切山遺跡で見つかった陥し穴

いしきやま 石切山遺跡の調査

平成9年9月から10年3月まで、津市高野尾町字石切山・南出で石切山遺跡の発掘調査を行いました。2月1日現在、縄文時代と見られる陥し穴、水溜土坑、中世墳墓状遺構、掘立柱建物などの遺構が検出され、縄文時代の石器、土器、古墳時代の土器、中世の土器、陶器、近世の陶磁器類等が出土しました。

このような資料から、石切山遺跡周辺では遅くとも縄文時代（中期:5000～4000年前）頃から人々が生活を営んでいたことがわかりました。また、陥し穴は現在10基検出されて

いますが、これは三重県内では二番目に多い発見数となりました。陥し穴は遺跡の南東部で多数発見されており、この辺りが当時の狩猟エリアだったことがわかります。

また、陥し穴の集中する周りでは自然の川や水溜め穴も見つかっています。陥し穴が中世以前に行われた土地の削平によって深く削りとられているところを見ると、それ以前は小川が流れる山林であったようです。ここで水を汲んだり、水を飲むためにやってきた動物を捕獲したのかも知れません。（山口）

寄託資料の紹介

今年度寄託を受けた2件の資料を紹介します。

1件目は高野尾町の若菜義彦氏からの寄託資料です。自宅付近で発見された古墳時代の須恵器、中世の土師器、陶器などで、総数は数十点にのぼります。古墳時代の須恵器が発見された地点は、高野尾古墳群の範囲にあたっており、今回寄託された資料によって、この古墳群のおよその年代が推定できることとなりました。

古墳群出土とされる資料は、須恵器の杯、高杯、長頸壺、小型壺、甕、ミニチュア腺などですが、その特徴からみたおよその年代は、6世紀後半から7世紀初頭と思われます。遺物の特徴にやや時期幅が認められますが、全部で10基あったと推定されている高野尾古墳群が、3世代前後にわたって築造されたと仮定すれば、大きな矛盾はなさそうです。

2件目は高野尾町の懸家からの寄託資料です。この資料は豊久寺の現在の住職である懸瑛子氏が前住職の保管品をひきついでもので、発見地等についてはほとんどが不明です。しかし、残存状態が良い資料があることや、伊勢国分寺付近の発見とされる資料、前述の高野尾古墳群での発見であるという資料など、興味深いものがあります。

資料の内容は縄文土器、古墳時代の須恵器、

奈良時代の須恵器、中世の山茶碗、近世以降の陶器など多岐に渡りますが、残存状態が良いのは古墳時代の須恵器で、杯、短頸壺、提瓶などがあります。

工事や耕作によって、文化財が偶然に発見されることはよくあることです。その場合すぐに所管の教育委員会に連絡をいただけるとよいのですが、取り扱い方がわからなかったために個人で保管されていることもあります。文化財は発見した場所、日時、状況などがわかれば研究上たいへん貴重な資料となりますので、もしこのようなものを発見された場合は、ぜひ埋蔵文化財センターへ御一報下さい。

また、現在ご家庭でこのようなものを保管されている方も、ぜひご連絡をお寄せ下さい。あなたが保管されている資料が、津市の歴史の謎を解く鍵になるかも知れません。

お預かりした資料は、津市埋蔵文化財センターで大切に保管するとともに、広く市民の方々に公開し、今後の調査と研究に役立ててまいります。文化財の保護と調査・研究に、市民のみなさまの御協力をお願い致します。

【津市埋蔵文化財センター】（土日祝は休み）

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601



若菜義彦氏寄託資料



懸家寄託資料

研 究 ノ ー ト

■津市北郊の丘陵に位置する川北遺跡（大里川北町・古墳時代前期）では竪穴住居が75棟検出されているが、ほとんどのものが周溝から延びる排水溝をもっており、なかには何棟もの竪穴住居から延びる排水溝が一本の主要排水溝に流れ込んでいる例もある。市内では、やはり丘陵上に位置する弥生時代の長遺跡（河辺町・中期・約200棟）や高松C遺跡（大字半田・後期・32棟）でも排水溝をもつ竪穴住居が検出されており、弥生時代以降、この地域の丘陵部に立地する竪穴住居の特徴のひとつといえよう。

一方、津市南郊の台地上に位置する四ツ野B遺跡（高茶屋小森町・弥生時代後期～古墳時代中期・87棟）で検出された竪穴住居は、周溝をもつものが多いが、排水溝はまったくない。貯蔵穴をもつものも多いが、これらの多くは周溝と重複している。周溝の機能については、おもに排水や床面の湿気抜きなどといわれているが、貯蔵穴と重複している場合、貯蔵穴の中のものに影響が及ぶと思われる。少数ではあるが、周溝と重複しない貯蔵穴も検出されており、両者の機能に違いがあるのかどうか注目している。（村木）

■用途不明とされている遺物に「小型円板」と呼ばれるものがある。中・近世の陶磁器類の破片を円形に2次加工したもので、用途については、冥銭、つぶて、おはじき、土錘、灯心押え等諸説があり、未だ定説はない。

また、いずれの説も円形に加工された資料のみを対象とした形態的特徴からの考察にとどまり、推論の域を出るものではなかった。

平成8年度に調査を行った四ツ野C遺跡では、形態的に「灯心押え」と考えられる磁器の2次加工品が3点出土した。このうち1点は円形ではなく方形に加工されており、3点に共通の特徴として油脂状の付着物が認めら

れる。加工品の周縁部には黒褐色の膠着物が認められ、灯明油の焦げ付きとみられる。

付着物の化学分析の可否は確認中であるが、油であることが確認されれば、陶磁器の2次加工品の中に灯心押えが存在することが立証されよう。また油の種類が判明すれば動物性油と植物性油の普及率も検討可能となる。

近世以降は「掻き立て」が普及したとされるが、依然として2次加工品が灯心押えとして普及していたと考えられるようになるかもしれない。形態についても円形以外の形態のものも含めた検討が必要となろう。（山口）

■昨年から近世遺跡の調査に携わることが多く、絵図の描写と調査結果の比較を通じた両者の整合性を検討する機会を得た。

ひとつは専修寺境内遺跡での庭園遺構の調査である。18世紀代後葉に描かれた絵図で、宝暦年間の絵図には建物や池が鳥瞰図的に描かれている。もう一方の寛政4年の絵図には建物規模を記した墨書はあるものの池の描写はない。調査結果は、いずれの絵図にもない環濠からの導水施設を確認した一方、建物は検出されなかった。もうひとつの調査は、津城跡の試掘調査である。概要は7ページに述べるが、当初想定した遺構の痕跡は検出されなかった。何分狭い範囲の試掘に加え、後世の攪乱がかなり入り込んでいる。現代の生活面とさほど変化がないことの傍証にはなった。

いずれの場合も、絵図自体は有効な情報を含んだ価値ある史料ではあるが、ある一時期の姿を描いたものには違いない。発掘調査という時間軸を遡る作業にとって、その情報のみに拘束されることには注意が必要であろうし、逆に史料の有効性を認識した調査の進め方も考慮する必要がある。史料と調査をいかにつなげるかという点で、今後一層重要性を増すであろうと感じた一事例である。（中村）

遺跡紹介 ⑥ 津市内の縄文時代遺跡

かつて、津市内の歴史は弥生時代から語り始められることが多かったのですが、近年の発掘調査によって縄文時代に属する遺跡の確認が増加するようになりました。その数はまだそれほど多くはないものの、現在の状況をここでまとめておきたいと思います。

縄文時代は、草創期（約12,000～9,000年前）、早期（約9,000～6,000年前）、前期（約6,000～5,000年前）、中期（約5,000～4,000年前）、後期（約4,000～3,000年前）、晩期（約3,000～2,300年前）の、6つの時期に区分されています。

現在、津市内では15か所で遺跡が確認されています。

津市内で最も古い縄文時代の遺物と考えられるのは大里野田町の東浦遺跡(1)で出土した旧石器時代末期～縄文時代草創期の木葉形尖頭器で、素材にチャートという固い石材を用いています。木の柄の先に結わい付けて、槍のように使って獲物を突き刺したのでしょう。

土器でもっとも古い時期のものは、大里窪田町の橋垣内遺跡(6)から出土した押型文土器の破片で早期の遺物です。外面に隅丸の市松文が施されている、鉢の口縁部の破片です。

遺構が確認された遺跡は、大里睦合町の大里西沖遺跡(4)で、早期と中期の竪穴住居が一棟ずつ確認されています。早期の住居は径3m程の楕円形で、多数の壁柱穴をもちます。中期の住居（写真）はやや大きく、径4.4～4.8mの歪な円形で中央部西側に炉を持っています。この住居址からは中期後葉の土器が出土しています。志登茂川中流域ではこのほかに、小谷C遺跡(2)や東浦遺跡でも中期の土器が出土しています。

安濃川流域に目を転じると、中下流域の沖積平野部で、近年遺跡の増加が目立っています。時期の順に紹介すると、宮ノ前遺跡(7)や太田遺跡(8)で後期以降の遺物が出土している

のをはじめ、蔵田遺跡(10)では後期の宮滝式に比定される深鉢が一個体分出土しています。

また、晩期になると松ノ木遺跡(9)で炉を伴う竪穴住居が一棟確認されています。遺跡の立地は、志登茂川流域の各遺跡とは異なり川の沖積平野部にあって、今までは縄文時代遺跡の存在があまり考えられていなかった場所です。稲作の開始をもって縄文時代と弥生時代の画期とするならば、こうした沖積平野部（低地）への居住地の進出を、両時代の過渡期の段階として理解する要素となるかも知れません。この時期になると、遺構の確認された遺跡も多くなり、四ツ野B遺跡(15)では深鉢を用いた土器棺が確認され、向山遺跡(14)では晩期から弥生前期にかけての良好な資料が土坑から出土しています。また、志登茂川流域の六大A遺跡(5)からも散発的ながら深鉢片の出土がみられます。これらは、東海地域に特徴的な凸帯文土器を主体としながら、一部に中部系の浮線文土器の流入がみられます。いずれも客体的で少量ですが、納所遺跡をはじめとしていずれの遺跡でも確実に存在するようです。こうした土器の流入は、当時の地域間交流をものがたと考えられます。

市内の縄文遺跡の状況を簡単にまとめると、

- ① 志登茂川流域では丘陵・台地上に遺跡の分布がみられること。
- ② 安濃川流域では後期以降に低地への進出がみられること。
- ③ 晩期の遺跡には凸帯文土器に中部系の浮線文土器が混入すること。

などが挙げられます。しかし、安濃町や芸濃町など周辺市町村には多くの縄文遺跡が存在しています。調査機会の粗密にも関連しますが、より詳しい様相は、今後の遺跡数の増加を待っての検討が必要となるでしょう。

（中村）



津市内縄文時代遺跡位置図 (●は遺構確認遺跡)

No.	遺跡名	所在地	出土遺物の時期					確認遺構
			創	草	前	中	後	
1	石切山遺跡	高野尾町字石切山・南田						陥し穴
2	小谷C遺跡	大里山室町字小谷						
3	東浦遺跡	大里野田町字東浦	○	○	○	○	○	竪穴住居
4	大里西沖遺跡	大里野田町字西沖						
5	六A遺跡	大里野田町字花村						
6	橋垣内遺跡	大里野田町字橋垣内						
7	宮ノ前遺跡	長岡町字宮ノ前						土坑
8	太田遺跡	安東町字太田						
9	松ノ木遺跡	安東町字松ノ木						竪穴住居(晩期)
10	蔵田遺跡	納所町字蔵田						
11	納所遺跡	納所町						
12	殿村遺跡	大字殿村字井尻						
13	垂水A遺跡	大字垂水字法ヶ丘ほか						
14	向山遺跡	高茶屋小森町字向山						土坑(晩期)
15	四ツ野遺跡	高茶屋小森町字四ツ野						土器棺



東浦遺跡 木葉型尖頭器



橋垣内遺跡 押型文土器



大里西沖遺跡 竪穴住居



大里西沖遺跡 深鉢破片



蔵田遺跡 深鉢



四ツ野B遺跡 深鉢



松ノ木遺跡 浅鉢



納所遺跡 浮線文系土器破片



六A遺跡 深鉢破片



四ツ野B遺跡 浮線文系土器破片

(四ツ野B遺跡以外の写真は三重県埋蔵文化財センター提供)

遺物紹介 ⑥ 柳谷遺跡

ふたくちつぽ
双口壺

亀井遺跡

そうきやくこ
双脚壺

今回は、津市内で発見された特殊な形をした弥生土器を紹介します。

双口壺は、大字野田の柳谷遺跡から出土しました。柳谷遺跡は、岩田川右岸の丘陵にある弥生時代後期の集落で、^{たてあな}堅穴住居が5棟検出されています。

この壺は、二つの壺を胴部の側面で接合したもので、接合部はあいてつながっています。胴部は丸味をもち、底部は平底で安定感があります。県内でも出土例のないもので、弥生時代後期の堅穴住居から出土しましたが、くわしい用途についてはわかっていません。

双脚壺は、河辺町の亀井遺跡から出土しました。亀井遺跡は、安濃川の支流、美濃屋川沿いの微高地にある弥生時代中期の遺跡です。

この壺は、胴の下半分が二本の脚状になっていたと考えられるもので、脚の下の方は欠損しているため、推定復元されています。や

や袋状になった口縁部に、ソロバン玉状に張る胴部、断面が楕円形の脚部よりできていますが、このような形の土器は、全国的に類例をみないものといわれています。弥生時代中期の土坑から、大量の土器とともに出土しましたが、この土坑については、出土した土器がいずれも破片で、ほとんど完形に復元できないことや、そのなかに双脚壺のような特殊な土器が含まれていることなどから、^{かんぼ}墳墓か祭祀にかかわる遺構と考えられています。

弥生時代の安濃川の流域では、拠点集落である納所遺跡がまず最初に形成され、以後、そこから分村するような形で集落が増加していきます。このような農耕社会の発展に伴って、さまざまな儀礼や習俗が生れてきたと思われますが、このような特殊な形をした土器からも、そういった弥生人のくらしの一端をうかがうことができます。（村木）



遺跡位置図



双口壺



双脚壺（写真提供：三重県埋蔵文化財センター）

最近の発掘調査から

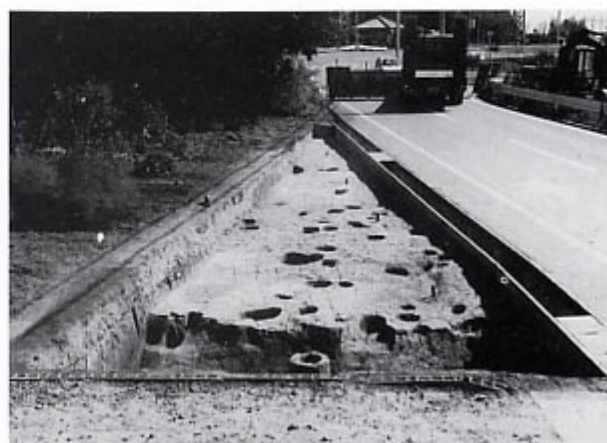
宮ノ前遺跡

宮ノ前遺跡は、長岡町と河辺町の境界付近にある丘陵の南側の斜面に立地する遺跡です。平成元年度と5年度に、一般国道23号中勢バイパスの建設に伴う発掘調査が三重県埋蔵文化財センターによって行われており、弥生時代から中世の集落であったことが確認されています。

今回の調査は、市道の拡幅にともなう行われたものです。調査区は、宮ノ前遺跡の西端にあたるところで、調査区の西側は、遺跡の部分より一段低い水田となっています。調査の結果、飛鳥・奈良時代の大溝、鎌倉時代の井戸や掘立柱建物などが検出されました。

大溝は、調査区の西端で検出されたものです。規模は、深さ約1.4m、幅3m以上で、地形に沿うように南北に伸びるものと考えられ

ます。溝の中には粘土が厚く堆積していましたが、これは水の流れが緩やかであったことを示すものでしょう。遺物は、土師器と須恵器が上層を中心に出土しています。集落の最も端に位置するこの溝が、どのような目的で掘られたのか、興味深いところです。



調査後の様子（西から）

津城跡

昨年9月に遺構・遺物と層位の確認を目的とした予備的な試掘調査を実施しました。調査を行ったのは、市内中央部にある合同ビルの敷地です。ここはかつて津城の大手門である京口御門の付近で、嘉永年間（1848～1853）の絵図では、外堀にかかる土橋や門構え、番所、そして城代家老職の藤堂仁右エ門屋敷が調査地に該当すると予想されました。

調査の結果、4か所の試掘坑からは18世紀代以降の遺物（陶磁器・瓦）が若干出土したものの、当初予想された大手門の遺構や石垣の痕跡などは確認されませんでした。また、層位の点でも、明治期以降も町の中心部であったことからかなりの攪乱が入っている状況です。調査がスポット的な範囲であるため、現状では城跡の様相は不明と言わざるを得ませんが、今後も敷地内の調査範囲を広げ確認調査を行っていく予定です。

慈智院本堂（県指定文化財）

慈智院本堂は、鬼瓦の簷書から寛永16年（1639）に建立されたと考えられており、一身田寺内町で最も古い建物とされています。今回の試掘調査は保存修理事業にともなうもので、基壇・礎石の状況や前身建物の有無を確認するために行いました。調査の結果、前身建物は存在しないことがわかりましたが、基壇の下から鎌倉時代以降とみられる土坑やピットが確認され、寺内町の成立を考えるうえで貴重な成果となりました。



調査後の様子（南東から）

埋文センターこの1年

津市埋蔵文化財センターがオープンして、今年で丸3年がたちました。今年度は公用車の購入や、センター内の清掃の委託を開始するなど、施設の体制が徐々に充実した年となりました。

さて、平成9年度もいくつかの事業がありました。発掘調査関係では専修寺境内遺跡・石切山遺跡・宮ノ前遺跡で本調査を行なったほか、約10件の試掘調査を行ないました。なかでも専修寺境内遺跡では、庭園の池の遺構と、環濠から池に水を取り入れるための導水

施設が発見されており、庭園の起源や変遷を考える上で貴重な成果がありました。一方、石切山遺跡では、縄文時代の陥し穴が10基発見されましたが、これは三重県の遺跡では2番目に多い発見例となりました。

また今年度のセンターへの来館者は、片田小学校や敬和小学校の遠足や公民館主催の講座をはじめとして約450人にのぼりました。また例年のように、夏休みの期間中には自由研究に取り組む小中学生の来館が相次ぎました。

センター日誌抄

平成9年

10月6日《調査》一身田慈智院立会い調査
 10月13日《調査》宮ノ前遺跡調査終了
 10月14日《見学》敬和小学校遠足 50名
 10月15日《見学》橋北公民館「婦人学級」 45名
 10月16日《調査》専修寺境内遺跡立会い調査
 10月23日《会議》県埋文担当者会議に出席
 10月29日《資料貸出》県埋文センターへ稲葉古墳群・藤谷埴輪窯跡群・明合古墳・坂本山6号墳出土遺物を貸出
 11月11日《調査》窪田森添遺跡試掘調査
 ～13日
 11月13日《会議》全国公立埋文協北陸・中部

～14日 ブロック会議に出席

11月14日《調査》高茶屋大垣内遺跡立会い調査
 ・16日 査
 12月2日《見学》一身田小学校「家庭教育学級」 20名
 12月2日《調査》専修寺境内遺跡立会い調査
 ～3日

平成10年

1月16日《見学》南立誠小学校「家庭教育学級」 37名
 1月30日《調査》納所遺跡立会い調査
 ～2月3日
 2月2日《見学》桑名市市教研歴史部会 15名
 2月3日《調査》垂水A遺跡試掘調査開始
 2月10日《会議》県埋文担当者会議に出席

《編集後記》

今年度もまた、慌ただしく過ぎ去って行っていました。毎年この時期になるとやり残したことが気にかかるけれど、それでもやはり新しい季節はやってきてしまいます。タイムマシンが欲しくなるのは、古代人の生活を見たい時だけではありません。〈山〉

発行日：1998. 3. 31

編集・発行：津市埋蔵文化財センター
 〒514-0058
 三重県津市安東町1225

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601

印刷：伊藤印刷株式会社